

日本學報 別冊

第49輯・pp.95～106

認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い

森山新

<http://dasan.sejong.ac.kr/~morishin/>



韓國日本學會

2001. 12.

<http://kaja.or.kr>

認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い

森山新*

<http://dasan.sejong.ac.kr/~morishin/>

〈要 旨〉

場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違いを、Langacker(1991a, 1991b)の認知言語学の観点を取り入れつつ考察した。

その結果、格助詞のデとニは場所を示すという点では共通しているが、デ格は場所を表す背景格であり、そのため前景の動作連鎖によって表された動作や作用の行われる場所を背景的に示す。これに対し、ニ格はガ格と対峙した参加者を表す前景格であり、ニ格の近接領域によってガ格やヲ格の存在する場所や、存在するようになった場所を示す。こうした違いはこれまで中右や菅井などの先行研究の中で、部分的に論じられてきたが、本研究はこれらの研究とLangackerを中心に進められてきた格標識に関する研究との関係を一にし、認知言語学的に整理したことにその意義がある。またこうした認知言語学的研究により、存在を表す場所がニ格で表され、動作や作用が行われる場所がデ格で表される認知的なメカニズムについても明らかになった。

本研究は教育的目的から行われ、日本語学習者に対し、とかく混乱の対象となりがちな日本語の格助詞教育に関して、なんらかの方向性を提示しようとする基礎研究である。

key word : 格助詞、デ、ニ、認知言語学、場所

1. はじめに

日本語の格助詞の中でデとニはともに場所を表すものとして、日本語学習者にしばしば混同を引き起こし、以下のような誤りの原因となる。

- (1) * 私は今、仁川で住んでいます。
- (2) * ゴミはゴミ箱で捨てなければなりません。
- (3) * 大学に日本語を習います。
- (4) * 私の父は貿易会社に働いています。

さらにデとニは以下に示すように相互交換が可能な場合すらあり、学習をさらに困難なものとしている。

- (5) 花が咲く 花が咲く どこに咲く 山に咲く 里に咲く 野にも咲く。(ニはデに交換可能)
- (6) 福沢諭吉は下級武士の家で生まれた。(デはニに交換可能)

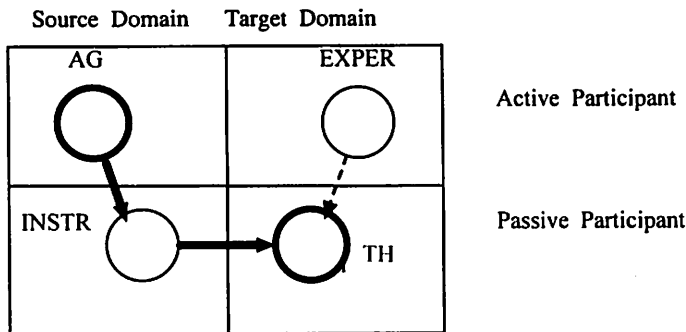
認知言語学の立場に立てば、言語に表された形式の違いは、何らかの意味の違いが反映されたものととらえることができる。では場所を表す格助詞のデとニはその意味・用法においてどのような違いがあるのか。本稿では教育的な動機から、格助詞デ・ニの違いについて、特に場所を表す用法に焦点を当て、最近の認知言語学の研究成果などをも取り入れながら明らかにしてみたい。

2. 先行研究

日本語の格助詞を含む、格標識に関する認知言語学的な研究としては、何といてもLangacker(1991a,1991b)などを挙げることができる。認知言語学では認知主体の主観が認知に反映されると考える。そして認知対象のうち、認知主体が焦点化した部分が前景を構成し、それ以外（背景）に比べて高い際立ちを持つと考える。

Langacker(1991a, 1991b)では特に主格、具格、対格、与格などを中心とした分析がなされ、それらの格標識はそれぞれプロトタイプとして図1に示されるような動作連鎖の参与者としての行為者(Agent)、道具(Instrument)、被影響者(Patient/Theme)、及び経験者といった意味・特徴づけが可能であるとしている。しかし彼の一連の研究では、前景の動作連鎖を構成する参与者のプロトタイプ的な意味とその格標識との関係を中心として研究がなされており、その結果日本語のデ格については具格としての用法に限られることとなり、場所格デについての言及はあまり見出せない。

図1 二重目的構文の動作連鎖 (Langacker(1991: p.327) 図7.5)



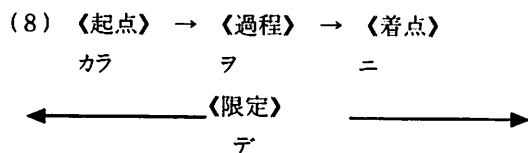
一方対象を日本語に限定し、場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違いについて研究した論文には様々なものがあるが、そのうち認知言語学的な観点からその違いを論じたものとしては、菅井(1997, 2001)、中右(1998)、森山(2000, 2001)などがある。

まず菅井(1997)ではデ格の意味特性について、認知言語学的な観点からの解明が試みられている。デ格には道具、原因、場所、時間、材料、様態などのさまざまな意味・用法があるが、このうち場所を表すデ格については、ニ格との比較の中で分析がなされている。これによると、デ格はカ格やヲ格を空間的に限定し、出入りを許さないが、ニ格はカ格やヲ格を空間的に限定するかどうかは動詞の語彙的意味に

依存するものの、主にガ格やヲ格の着点や起点のみを限定することが多いとしている。例えば(7)において場所である「道」が(a)のようにテ格で表されると、「倒れる」という行為全体が「道」という場所で生起するが、(b)のようにニ格で表された場合には、着点のみが指定されるとしている。

- (7) (a) 道で倒れる。
 (b) 道に倒れる。

さらに菅井(2001)では菅井(1997)の研究を発展させ、日本語の格助詞の体系化が試みられており、結論として、動詞によって表される事象において「カラ格」「ヲ格」「ニ格」が各々「始りの部分」「始まりと終わりまでの間」「終わりの部分」をプロファイルするのに対し、「テ格」は「動詞の語彙的意味に変化を被らずに限定するもの」といった範疇化がなされているとして、(8)のような図を提示している。場所を表すテ格の場合では、「主格NPまたは対格NPが「テ格」の場所に存在するという関係が、事象を通じて変化しない」ことであるという。(7)を例にとれば、(a)では省略されている主格NPがテ格の「道」に存在する関係が「倒れる」という事象を通じて変化していない。これは(b)のようにニ格が用いられると、省略されている主格NPがニ格の「道」に存在する関係は「倒れる」という事象を通じて「不在から存在へ」と変化していくのとは対照的である。



菅井の一連の研究(1995, 1997, 1998, 2000, 2001)は、日本語の格助詞ニ、テ、ヲ、カラなどについて、豊富な例文を用い綿密な分析がなされている。しかし上述のLangackerを中心として行われてきた認知言語学的観点からの格標識研究との関連については、残念ながら明確に示されているとは言い難い。

一方中右(1998)では、場所を表す「ニ・テのすみわけ原理」と称してそれらの役割分担が紹介されている。それによればニは「個体」の位置を合図し、典型的に状態・過程・行為などの基本述語動詞に内在的な項(argument)を表示するのにに対し、テは「状況(状態、事態、出来事、事象、現象、行為、活動など)」の位置を合図し、典型的に随意的な付加語(adjunct)を表示するとしている。例えば(9)で(a)はニ格、(b)はテ格が用いられているが、位置の項がニ・テのいずれの格表示で合図されるかは、ガ格の項が個体か状況かによって決まり、個体の場合にはニ格、状況の場合にはテ格になると言う。

- (9) (a) 本棚に地球儀がある。
 (b) 大講堂で卒業式がある。

また述語体系による役割分担を見ると、ニ格は(10) (a) (b)のように、「状態」述語の場合には「位置」を、「過程」述語の場合には「着点」を表す。また「行為」述語の場合には、(c)のように「位置」を表す場合と(d)のように「着点」を表す場合とがあるという。

- (10) (a) どの動物園にも象がいる。
 (b) 電車が駅に着く。
 (c) 子供が壁に穴を開けた。
 (d) 太郎が壁に絵をかける。

これに対しデ格は随意的な付加語であり、内在的な項によって表された基本状況をまるごと包み込む外側の位置空間を表すとしている。(11)を例にとれば、デ格は「サンマは流れ藻に産卵する」という基本状況をまるごと包み込む位置空間を表すという。

- (11) サンマは沖合で流れ藻に産卵する。

さらに中右(1998)では、場所を表すデは(12)に示されるように、時としてデからニへの収束が起きることがある点に注目している。

- (12) (a) 福沢諭吉は下級武士の家で生まれた。
 (b) 福沢諭吉は下級武士の家に生まれた。

このような現象は、デによって示されていた位置関係が、当該事態に不可欠な直接参加者として把握される時に起きる「比喩的な認知転換」であるとし、これにより、もとは付随的であった物理的空間を基本状況内に取り込み、全体で一つの緊密一体化した新たな状況を作り出すという。これを中右は「状況内在化」と呼んでいる。(12)を例にとれば、(a)でデで表示された「下級武士の家」という場所は単に諭吉の出生における偶然的な位置空間をさすにすぎないが、(b)のようにニで表示されると、その「下級武士の家」という実体は当該事態に内在化され、諭吉出生にまつわる不可欠な位置空間として、宿命性や必然性が付与されるという。

中右の主張は認知言語学の観点が生かされ、さらに言語の違いを越えた普遍的モデルの構築がめざされている点で注目し得る。しかし菅井の研究同様、Langackerらの研究との関連が明確になってはいない。また状況内在化とその効果についての言及が感覚的で、やや具体性に欠ける面がないとは言えない。

一方、森山(2000, 2001)では認知言語学の観点から、格助詞ニとヲの意味・用法に関する分析が行われている。これは、菅井や中右では明らかになっていないLangackerの格標識研究と日本語の格助詞との関係がかなり明確に示されている。日本語のヲ格やニ格は対格や与格に比べ、(13)

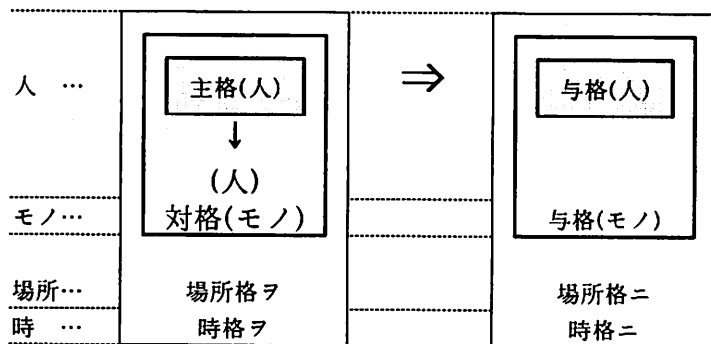
(14) に示されるような場所や時などの空間的な用法を含んでおり、その用法が広い範囲に及んでいる。しかしLangackerで示されている対格や与格の意味・特徴づけはこうしたヲ格やニ格の空間的な用法にも、拡張された形で適用することが可能であるとしている。

- (13) (a) 女の人が道を歩いている。(場所)
- (b) 思春期を経て大人になる。(時)
- (14) (a) 先週、私は大阪に小包を送った。(場所)
- (b) 私は8時に朝ご飯を食べる。(時)

日本語のヲ格、ニ格の意味・用法が図2に示されている。これによると対格(ヲ格)は主格(ガ格)を起点とした動力の下流にあり、その影響下に置かれ受動的立場にある。プロトタイプとしてはモノであるが、受動的立場にある人、さらに場所・時などもその拡張として含む。一方与格(ニ格)は、目標領域に存在する能動的参与者であり、主格という源泉領域に存在する能動的参与者に対峙している。ニ格はプロトタイプとしては能動的な参与が可能であるが、モノ、場所、時への拡張を含む。これらモノ、場所、時への拡張において、与格の特性としての能動的参与性は主格に対する非受動性、独立性として表れ、そうした非受動性や独立性は、主格の動作・運動などが向かう「前方に対峙するもの」としての意味を付加するとしている。しかしながら森山(2000, 2001)の認知言語学的分析は格助詞ヲ、ニに限られており、場所のテに関する言及はなされていない。

本稿ではこれらの先行研究をもとに、認知言語学的な観点から格助詞テ・ニの意味・用法とその違いについて考察してみたい。

図2 日本語のヲ格、ニ格と主格との関係



3. テ格とニ格に対する認知言語学的考察

前述したようにLangackerの一連の研究では、前景の動作連鎖を構成する参与者のプロトタイプの

な意味とその格標識との関係を中心として研究がなされており、日本語のテ格については具格としての用法に限られ、場所格テについての言及はあまりない。また中右(1998)では場所格としてのテ格が「状況」の位置を合図する随意的な付加語であると指摘されている。

これらのことから言えることは、場所格としてのテ格は前景を構成する動作連鎖の参与者には含まれず、その背景としてのSettingを形成する背景格の一つであるということである。

また前景を構成する動作連鎖には図1に示されているように、行為者、道具、被影響者をそれぞれ意味役割のプロトタイプとする主格(ガ格)、具格(テ格)、対格(ヲ格)などが含まれ、さらに経験者を意味役割のプロトタイプとし、新たな動作連鎖の起点となりうる与格(ニ格)も含まれる。ここで一つ問題となるのは、菅井(1997)において、場所を示す用法を含め、テ格が修飾する対象は用言全体というよりは単一の格成分に収斂されるとし、修飾対象となる単一の格成分とは基本的にガ格である(例外的に間接受動文では対格成分が優先的にテ格の修飾対象となる)としている点である。具体的に言えば、例えば(15)でテ格の「ベランダ」に存在するのはガ格の「花子」だけであり、ヲ格の「星」は「ベランダ」に存在するとは言い難いとし、このようなことからテ格の「ベランダ」が修飾するのはガ格だけであると述べている。要するに参与者間の場所的な包含関係をもって修飾関係の是非を問っているわけであるが、修飾関係と包含関係とが同じであるというのは正しくないと思われる。Langackerなどの先行研究をもとにした本稿の主張のように、テ格が背景格として存在することを考えれば、背景格としてのテ格の修飾対象は単一の格成分に限るとすべきではなく、前景全体、言い換えれば、主格をはじめ、前景にあって動作連鎖に関与している参与者を格標識した、すべての格を修飾するとすべきであろう。このことを(15)を例に具体的に言えば、テ格で示された「ベランダ」は、ガ格で示された「花子」を起点とし、「星」を着点とした動作連鎖全体(前景)に対し、背景の役割を果たし、その意味でテ格は「花子が星を眺めていた」全体を、Settingという面から修飾していると言うべきであろう。

(15) 花子がベランダで星を眺めていた。

一方ニ格は、森山(2000, 2001)によれば主格に対峙する形で存在し、プロトタイプとしては、主格とともに目標領域において新たな動作連鎖の起点となりうる能動的参与者であるとしている。このことからわかるようにニ格はテ格とは異なり、(主格を起点とした動作連鎖には含まれないが)「主格に対峙する形で存在」する「前景の参与者の一つ」を表しているということができる¹⁾。中右(1998)で場所のテ格は「状況」の位置を合図するのに対し、場所のニ格は「個体」の位置を合図すると言っているのは、言い換えればテ格が背景格として存在するのに対し、ニ格は前景の参与者の一つとして、ガ格に対峙するモノ(個体)として存在するということを意味していると言える。もちろん場所を表すニ格はモノではない場合もあるが、図2に示されているように、ガ格から独立的、非受動的に存在するという意味で、ガ格に対峙するモノ(個体)の拡張としてとらえることは可能であろう。より具体的に言えば、(10)においてニ

1) その意味で、認知主体であり、話し手でもある1人称と、それに対峙する形で存在する2人称が、それぞれガ格、ニ格の最大のプロトタイプであると言えようが、この点については後に述べることとし、本稿では詳しく述べない。

格の「動物園」、「駅」、「壁」はそれぞれ前景の参与者の一つとして、ガ格の「象」、「電車」、「子供」、「太郎」といった参与者に対し独立的、非受動的な参与者として対峙しているということである。こうした独立性、非受動性は、Langacker(1991a)などでも引用されている(16)のような使役文において、使役対象(Causee)をニ格で表すか、ヲ格で表すかの違いを考えてみるとよりいっそうはつきりするであろう。

(16) 太郎が次郎を／に行かせた。

すなわち(16)の使役文は、ヲ格を用いると次郎は完全に太郎の意のもとに置かれた強制的、受動的な意味となり、ニ格を用いると同じ使役文でも次郎自身の意志が考慮された自主的、非受動的な使役となる。ニ格はヲ格と同じく目標領域にありながらも、図2に示されているようにヲ格とは異なり、非受動的、独立的にガ格に対峙しているのである。

4. テ格とニ格の違いについて

ここでテ格とニ格の違いについて、先行研究に代案を示す形で整理してみたいと思う。

まず中右(1998)では、ニとテのすみわけを説明するにあたって、ニは個体の位置を、テは状況の位置を合図し、ガ格が個体の場合にはニ格が、状況の場合にはテ格が用いられるとしたが、その理由は何なのであろうか。その理由を(9)を例に考えてみたい。

(9) (a) 本棚に地球儀がある。

(b) 大講堂で卒業式がある。

(a) のガ格は「地球儀」という個体であるが、(b) は「卒業式」という状況である。すなわち(a) では「地球儀」と「本棚」はどちらも前景を構成する参与者として存在し、両者はそれぞれガ格とニ格として互いに対峙している。日本語の場合、場所を示す格でも、焦点化がなされるとそれらはヲ格またはニ格となって、対格や与格の拡張的な参与者としての資格が付与されるものと思われる。これに対し(b) ではガ格の「卒業式」だけが前景で、「大講堂」はその背景として存在している。ではなぜ(a) の場所「本棚」は前景の一つであるのに、(b) の場所「大講堂」は背景であるのか。それは(a) ではガ格の名詞が個体を示すのに対し、(b) ではガ格は状況を示す名詞となっているためである。ガ格の名詞が(前景の) 個体の場合、それに対峙する形で存在するものも(前景の) 個体としてとらえられるが、ガ格が状況を示す名詞の場合、その状況名詞は一つの事態が名詞化されたものであり、その中には動作連鎖が含まれていると見るができるわけである。「卒業式」を例にとって説明すれば、「卒業式」という名詞には、卒業に関する事態が動作連鎖として内包されている。その

ことは以下のような文を比べてみれば明らかである。

(17) (a) 大講堂で卒業式がある。

(b) 大講堂で総長が卒業生に卒業証書を授与する。

すなわち (a) では前景が一つの名詞で表現されているが、それは (b) では動作連鎖で表しうる一つの事態によって置きかえられて表現されている。その事態にはガ格、ニ格、ヲ格が含まれている。このように状況を示す名詞はそれ自体に一つの事態、一つの動作連鎖を内包しているために、その場所もはや前景の参与者として加わる余地はなく、背景となり、デ格で示されるようになるのである。

最後に中右(1998)で主張されている「状況内在化の比喩的転換」とその効果について考えてみたい。「状況内在化の比喩的転換」とは、デによって示されていた位置関係が、当該事態に不可欠な直接参加者として把握される時に起きるもので、これにより、もとは付随的であった物理的空間を基本状況内に取り込み、全体で一つの緊密一体化した新たな状況を作り出すといったものであった。しかし前述したように、Langackerなどの先行研究との関連が不明確であると同時に、なぜこのような転換が可能なのか、なぜこうした転換により、偶発的意味合いが宿命的必然性の意味合いへ変化するのかなどがはっきりしていない。

認知言語学的に見れば、「状況内在化」とは背景格から前景格への昇格を意味する。前景と背景との対立は認知的なものであり、認知主体がどこに焦点を当てるかにより可変性を持っている。例えば

(18) で「S大学」は、(a) では場所を示す背景格にすぎないが、(b) では前景格(主格)に昇格している。

(18) (a) S大学では全学生に日本語を教えている。

(b) S大学は全学生に日本語を教えている。

したがってこうした背景格から前景格への昇格は、認知的に見れば、認知主体が背景として存在していたものに焦点化を行った結果、前景の一つの参与者となったもので、以前は場所を示す背景格を形成していたが、新たに前景の参与者となったもの(デ格)は、ガ格と対峙し、場所を示すニ格となるのである。背景格として存在していた場合には、主格との関係は間接的で、そこには直接の動作連鎖もないが、焦点化の結果、動作連鎖の参与者となった場合には、ガ格との間になんらかの動作連鎖による結びつきが生まれる。ただしここで「生まれる」というのはどこまでも主観的に連鎖の関係が構成され、認知されるようになったことを意味しているにすぎず、客観的に何らかの変化が生じるわけではない。中右(1998)では、背景と前景との間接性が偶発性としてとらえられ、焦点化により新たに認識されるようになった動作連鎖による結びつきを、「宿命的必然性」ととらえたのである。

次に菅井(1997, 2001)で指摘されているデ格とニ格の違いについて考察する。前述したように菅井(1997, 2001)では、デ格はガ格やヲ格を空間的に限定し、出入りを許さないが、ニ格は主にガ格やヲ格

の着点や起点のみを限定することが多いとしている。しかしなぜそうなのかといった理由についての言及はない。

これも前景と背景からなる認知図式を考えれば、その理由は明らかになる。背景は前景のSettingとして存在しているので、参与者であるガ格やヲ格はそのSettingから外れることはないし、参与者により変化を被ることもない。しかしニ格は図1に示されているように、ガ格と対峙した形でその目標領域に存在するものであり、ガ格やヲ格の着点（時に起点）としての位置を示すようになるので、ガ格やヲ格の着点（または起点）のみを限定するようになるのである。

5. 認知言語学的分析が教えてくれるもの

本章では最後に、こうした認知言語学的観点を用いて、場所を表す格助詞デ・ニの用法を研究することが、今までの研究と比べ、どこが異なっており、またこうした研究が日本語教師や学習者にどのようなことを教えてくれるのかを考察してみたい。

最初に述べたように、場所を表す格助詞デ・ニは日本語学習にあたって紛らわしく、習得が難しいものの一つである。そのため日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』、森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、酒入他(1991)『外国人が日本語教師によくする100の質問』、寺村他編『ケーススタディ日本文法』など、多くの日本語教育文献や日本語学習教材で、これらの用法の違いを説明している。

その説明は大方において一致している。「日本語教育事典」を例にとってまとめてみると以下になる(p.454)。

に：(1) 事物が存在する場所を表す

①彼は食堂にいる。

②机の上に本がある。

(2) 主体による動作・作用を受けた結果、対象物が存在するようになった場所を表す

③私はそこにごみを捨てた。

④彼は新宿に土地を買った。

(3) 主体がその動作・作用を行った結果として、存在するようになった場所を表す

⑤学生たちはいすに腰掛けた。

⑥彼はあの川に落ちたらしい。

で：(1) 動作・作用が行われる場所を表す

⑦彼は毎日ここでテニスをする。

ニの(2)(3)の用法は、「移動の到達点を表す」と表現している場合もある。いずれにしても、

両者の違いを簡単に言えば、ニ格はガ格の存在場所やカ格やヲ格が存在するようになった場所など、「存在」の場所を示し、デ格は「動作・作用」の場所を示すといえる。ではなぜ「存在」の場所はニ格で表され、「動作・作用」の場所はデ格で表されるのであろうか。これに対する答えはこれまでの研究では何ら示されていないが、認知言語学的観点からは明確にその答えを提示することが可能である。

上述したようにニ格はガ格などと共に前景の動作連鎖を構成し、ニ格はガ格に対峙する形で存在している。したがってニ格はプロトタイプとしては場所ではなくモノ（存在物）である。それが場所を表すのは厳密に言えばメトニミーという認知の働きの助けによるもので、ニ格が場所を表すというよりは、ニ格で表されたモノの近接領域（上部、内部、表面、周囲などの領域）に存在するのである。（19）を例に説明すれば、厳密には（a）ではガ格の「彼」はそれに対峙して存在するニ格の「食堂」の内部に存在し、（b）ではガ格の「本」はそれに対峙して存在するニ格の「机」の上部に存在しているのである。両者の違いは（a）ではニ格の近接領域に存在することが明示されていないのに対し、（b）では「机」の近接領域に存在することが明示されている。（c）ではニ格「新宿」が場所を表しているが、この場合も「新宿」はどこまでもモノの拡張としてとらえられており、ガ格に対峙していると考えられることができる。

このようにニ格がモノというより場所を表す場合には、動作連鎖を構成するガ格とニ格が対峙する構図にあって、ガ格やヲ格がニ格の近接領域に存在する、または存在するようになったことを示しているのである。

- (19) (a) 彼は食堂にいる。
 (b) 机の上に本がある。
 (c) 彼は新宿に土地を買った。

これに対し、デ格が表すのは「動作・作用」の場所であるが、これは動作や作用にはある動作連鎖が存在されるか、少なくとも認知されており、これは前景を構成するため、それが行われる場所は、前景の動作連鎖が行われる舞台(Setting)として存在するようになる。その結果場所は、もはやニ格のように前景の動作連鎖を構成するモノとしてとらえることは不可能で、どうしても前景をとりまく背景として認知されざるをえない。このようなことから「動作・作用」が行われる場所は、背景格としてのデ格によって表されるのである。

6. まとめ

以上、場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違いを認知言語学的観点を取り入れつつ考察してきた。格助詞のデとニは場所を示すという点では共通しているが、デ格は場所を表す背景格、ニ格はガ

格と対峙した参与者を表す前景格である点が異なっており、その違いがこれまで中右や菅井などの先行研究の中で、部分的に論じられてきたわけである。本研究はこれらの研究とLangackerを中心に進められてきた格標識に関する研究との関係を一にし、認知言語学的に整理したことにその意義があると言える。またこうした認知言語学的研究により、存在を表す場所がニ格で表され、動作や作用が行われる場所がテ格で表される認知的なメカニズムについても明らかになった。今後こうした研究をその他の格助詞にまで押し広げながら、日本語格助詞の全体像を認知言語学の視点から明らかにしていきたい。こうした研究は日本語学習者に対し、とかく混乱の対象となりがちな日本語の格助詞教育に関して、何らかの方向性を提示する基礎研究となりうると考えている。

◀ 参考文献 ▶

- 酒入郁子・佐藤由紀子・桜木紀子・中村貴美子・中村寿子・山田あき子(1991)『日本語を教える④ 外国人が日本語教師によくする100の質問』、バベル・プレス(株式会社バベル)。
- 社団法人日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』、大修館書店。
- 菅井三実(1995)「対格の意味特性に関する覚書」『日本語論究IV・言語の変容』、和泉書院、pp.67-94。
- 菅井三実(1997)「格助詞「て」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43)、pp.23-40。
- 菅井三実(1998)「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130(文学44)、pp.15-29。
- 菅井三実(2000)「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊、pp.13-24。
- 菅井三実(2001)「現代日本語における格の暫定的体系化」『言語表現研究』17、兵庫教育大学言語表現学会、pp.109-119。
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢沢真人(1987)『ケーススタディ日本文法』、桜楓社。
- 中右実(1998)「空間と存在の構図」中右実・西村義樹著『日英語比較選書5・構文と事象構造』、研究社出版、pp.8-54。
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店。
- 森山新(2000)「認知的観点から見たヲ格とニ格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』4、高麗大学校教育大学院同門日本語教育研究会、pp.19-29。
- 森山新(2001)「認知的観点から見た格助詞ヲ・ニの意味のネットワーク」『第3回学術発表会及びシンポジウムプロシーディング』、韓国日本学会傘下韓国日本語教育学会、pp.53-59。
- Langacker, R. W. (1991a). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press. (韓国語(金鐘道)訳(1999)『認知文法の土台II』、図書出版朴而情)
- Langacker, R. W. (1991b) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.

- 早 稿 : 2001. 9. 30.
 ■ 심 사 : 2001. 10. 22.
 ■ 심사완료 : 2001. 11. 17.